

都留音楽祭のりゅう

都留文科大學 初等教育学科教授 有村 祐輔

毎年夏の盛り、お盆過ぎになると、大学の音楽棟がにわかに活気を帯びてきます。「都留音楽祭」が始まるのです。北は北海道から南は沖縄まで、全国各地から一〇〇名近くの人々がこの音楽祭に参加するために集まってきました。都留の名も近年この分野では随分知名度が高くなりました。今年で七年目を迎えるこの音楽祭は、ヨーロッパの古楽、つまり中世、ルネッサンス、バロック音楽を専門とするサマー・スクールを兼ねた音楽祭です。

近年この分野では、オリジナル主義と呼ばれる理念のもとに、過去の古い音楽を、その当時の楽器や演奏習慣に基づいて再現しようという運動が盛り上がりつつあります。それは、例えば楽器で言うならば、バッハやヘンデルの音楽を、ピアノとか普通のオーケストラ楽器で演奏するのではなく、チェンバロとかバロック・ヴァイオリン、ヴィオラ・ダ・ガンバと呼ばれる弦楽器などを用いて演奏することです。邦楽の世界では、琴、尺八、三味線など古い時代から今日まで、基本的に同じ形や機能をもった楽器が伝統的に使われてきました。しかし、ヨーロッパの楽器ではそうではなかったのです。時代と共に、その社会や音楽的ニーズに合うように楽器自体も色々な

改造が加えられてきました。そこでオリジナル主義とは、それを本来の姿に戻そう、その音楽が作曲された当時の響きを取り戻そうという一種の運動なのです。こうした古い時代の楽器には近代の楽器が失ってしまった繊細さや優しさがあります。リコーダー、リュートなどはその典型でしょう。そして、近年こうした古い楽器やその演奏に興味をもつ人々が増えているのも事実です。

音楽祭には色々な分野や年齢層の人々が参加します。高年齢者も珍しくなく、外国人も見かけます。学生、教師は普通としても、OL、主婦、サラリーマン、エンジニア、新聞記者、物理学者、医者、商店主、会社役員など様々です。こうした多彩な顔触れは、時には思わぬ幸運をもたらすこともあります。この地域の夏の名物、悪名高き「谷村虫」の被害者が続出したのは最初の年でした。たまたま受講生の中にいた皮膚科の先生がその腕を奮うチャンスとなったのはいうまでもありません。古楽器商のT氏は鍼灸師で漢方の専門家です。この会場で彼のアンティークの楽器が売れたという話はまだ聞いたことがありませんが、彼の治療を受けようという人々の予約は引きも切らずといったところですが、音楽祭の会場にはささやかなが

ら楽譜楽書、楽器、レコードなどの店も並んでいます。地方に住む人々にとって、これは貴重な情報源です。一般の店ではこうした古楽専門の資料はなかなか入手しにくいのです。また会場には古楽器製作者の協力で十五台以上のチェンバロ、小パイプ・オルガン、フォルテ・ピアノ（モーツァルト時代のピアノ）などが受講者の練習用と展示を兼ねて供用されます。

さて、五日間にわたって開かれるこの音楽祭の楽しみの一つは、毎晩行われる演奏会でしょう。現在日本の第一線で活躍する古楽演奏家たちの演奏が聴けるのです。バロックの名曲が古楽器オーケストラで演奏され、中世バンドが異国趣味豊かに珍しい楽器をかき鳴らし、モンテヴェルディが歌われ、優雅な古典舞踏が客席を魅了します。しかも出演者の多くは、このサマー・スクールの先生でもあります。勿論この演奏会は一般に公開されています。夏の暑い盛り、汗と熱気に包まれてこの音楽祭は幕を閉じます。新たな友情が結ばれ、五日間を音楽に打ち込んだ満足感に包まれて、人々はまた普段の生活に戻っていきます。古楽は何も難しいものではありません。初心者から専門家まで多様なレベルの愛好家が楽しめるのがこの音楽祭サマー・スクールのねらいでもあります。是非これに興味を持たれた方はのぞいてみてください。（都留音楽祭音楽監督）

『大学審議会組織運営部会』で 全国市長会を代表して意見発表

大学審議会は、昭和六十二年十月に文部大臣より「大学等における教育研究の高度化、個性化及び活性化等のための具体的方策について」諮問を受け、大学教育の改善、学位授与機関の創設、大学院の整備充実、平成五年度以降の高等教育の計画的整備など、教育・研究の多様な発展を図る観点から、高等教育全般にわたる改革方策について審議、答申を行っておりますが、昨年十月には組織運営部会が設置され、大学における教育研究活動の活発な展開に資するため組織運営の活性化に関し検討が

始められています。

組織運営部会は、学術情報センター所長猪瀬博氏外十三名の委員で構成されていますが、具体的な調査審議のなかで、(一)大学と外部との関係、(二)大学と内部の問題としての教員の活動の活性化、(三)大学全体の運営の問題等について、二月十二日に、国立大学協会、全国公立大学協会等から、また四月二十七日には、全国理事会、全国市長会及び公立大学設置団体協議会から意見聴取が行われました。このなかで、全国市長会からの推薦で都倉市長が、市立の大学設置団体（釧路市他十七）の市長を代表して都留文科大の実情を中心に意見を発表しました。市長は、都留文科大が地域に根差した大学で市民のための大学、市民に開かれた大学であり、若者に魅力ある大学づくりとしての将来計画や、新学科「比較文化学科」の増設、学生定員の増員などを柱に、限られた財政事情の現状での大学運営を円滑なものにするためには、地方小都市への財政援助が必要であると強く訴えながらお願いをしました。

